

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00921

研究課題名（和文）対日・対独協力者の「グレーゾーン」 国際比較研究を通じた歴史認識の刷新を目指して

研究課題名（英文）The "gray zone" cooperation with Japan and Germany: Aiming to renew historical understanding through international comparative research

研究代表者

高綱 博文 (TAKATSUNA, Hirofumi)

日本大学・通信教育部・研究員

研究者番号：90154799

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は戦間期から第二次大戦期にかけて日本帝国およびナチ第三帝国の占領下あるいは勢力下に置かれた中国または中東欧の各地域における現地社会に焦点を当てながら、その内部で顕在化した抵抗と協力の動的構造としての「グレーゾーン」の解明、ならびにそのアジアとヨーロッパを跨いだ国際比較を試みた。その課題に応えるために、＜敵・味方＞＜協力・抵抗＞のように二分法で捉えることのできない「グレーゾーン」という表現を分析概念に用いた。ナチの軍事的支配下の被占領地、ならびに日本軍占領下における中国現地社会の内部で、人々が政治主体としていかなる目的を持って支配者との関係を切り結んだのか個別に考察しながら比較検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

修正主義的歴史観の大きな問題として、隣国間関係を巡る政治情勢に応じて自らの「加害者性」を免ずる姿勢が挙げられる。その歴史認識は、被支配者の行動様式を「抵抗／協力」に類型化する二項対立的構図を前提としたものである。私たちの研究は、この単純な見解を斥けて占領地社会における支配・被支配関係の複雑な動態を現す「グレーゾーン」概念を提唱して各研究者がこの視座に基づき独占領地における統治構造の検討・比較を行うことで、修正主義に反駁する「グレーゾーン」研究の方法論、および国際的に共有可能な歴史観を提唱する。その点から本研究はこれからの世界市民に求められる価値観を歴史学の領域から創造する大きな意義を有する。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on local societies in China and Central and Eastern Europe that were occupied or under the influence of the Japanese Empire and the Nazi Third Reich from the interwar period to the World War II period, and This paper attempts to elucidate the "gray zone" as a dynamic structure of resistance and cooperation that has changed, and to make an international comparison across Asia and Europe.

In order to respond to this issue, we used the expression "gray zone" as an analytical concept, which cannot be grasped dichotomously, such as <enemy/ally> <cooperation/resistance>. A comparison of the occupied territories under Nazi military rule and the local Chinese society under Japanese military occupation, with individual consideration of what purpose people had as political subjects in severing their relationship with the rulers, investigated.

研究分野：歴史学・史学史

キーワード：グレーゾーン 対日協力者 対独協力 国際比較 帝国 歴史修正主義 歴史認識

## 1. 研究開始当初の背景

近年の日本を含めたアジアおよび欧州では第二次世界大戦に至る歴史の見直しを図る修正主義の動きが台頭している。実際にナショナル・ヒストリーの再建を目指す為政者は新たな歴史教科書の編纂などを通じてその潮流に掉さしている。その背景にはナショナリズムを背景として愛国/売国、協力/抵抗、支配/服従などの二分法的歴史観の行き詰まりがある。特に帝国主義支配の抵抗する民族解放運動やファシズム支配に抵抗するレジスタンス運動という既存の枠組みおさまりきれない占領地・植民地における複雑な政治空間と政治過程を考察するところの歴史学の新たな方法が求められる。

帝国主義やファシズムの支配への対応の一つとして提起されたものとして「グレーゾーン」(grey zone)という概念がある。占領地における一般民衆の「抵抗」とも「協力」ともつかない曖昧な態度を、プリーモ・レーヴィがアウシュヴィッツ内部の複雑に絡みあった「小宇宙」を描いたところの「灰色の領域」「グレーゾーン」という言葉を使い、戦時上海における中国文化人研究を行ったのがボシュク・フー氏であった。日本における戦時上海研究の先導者であった古厩忠夫(2003年逝去)は、日本の中国侵略の主体も一つでなく侵略の仕方もさまざまな方法があり、一方抵抗する中国の側にもさまざまな矛盾があったことに注目し、特に上海における対日協力者問題と共に<侵略と抵抗>の二元論的論理で把握できない「グレーゾーン」の問題を提起した。

現在、修正主義的歴史観の大きな問題となっており、隣国間関係を巡る政治情勢に応じて自らの「加害者性」を免ずる姿勢が挙げられる。その際に抑圧的な支配体制の存在は否定され、占領が一部正当化される。その歴史認識は、被支配者の行動様式を「抵抗/協力」に類型化する二項対立的構図を前提としたものである。プリーモ・レーヴィは自身のアウシュヴィッツでの経験に基づき、この単純な見解を斥けて占領地社会における支配-被支配関係の複雑な動態を現す「グレーゾーン」概念を提唱したが、それは統治の円滑化を図るべく編まれた支配構造の所産であったと指摘している。

要するに、本研究はプリーモ・レーヴィが提唱した「グレーゾーン」概念に由来し、近代ナショナリズムを背景とした敵/味方、協力/抵抗、支配/服従などの二分法的歴史認識の行き詰まりを克服するために東洋史と西洋史の若手研究者を中心とした実証研究を伴う史学方法論に関する共同研究である。

## 2. 研究の目的

本研究は第二次世界大戦に至る時期のアジア・欧州における占領地社会の分析および比較を通じて、グローバルな文脈で共通する統治構造を明らかにすることを目指すものである。既に現在の歴史学研究では、占領地社会において支配者と被支配者(現地住民)の関係は「抵抗/協力」に二分出来るものではなく、むしろ両者の関係性に複雑な動態が見られたことが明らかにされつつある。その一方で、両者の「政治的癒着」を殊更に強調しては占領地社会の実態を見過ごすことになる。当時現地住民は自律的主体ではなく、統治を円滑化するメカニズムの枠内で行動の選択肢を制限された存在であった。本研究はそうした占領地社会における支配体制を「グレーゾーン」(プリーモ・レーヴィ)として捉えて、その日本占領期中国およびナチ占領期東欧における実態を比較史の視座から解明する。

### 3. 研究の方法

(1) 西洋史と東洋史の研究者が、「グレーゾーン」概念を使用して比較史の視座から共同研究を実施する前提作業として同概念の学術的解釈に関する分野横断的調査を実施する。

(2) 現地調査を伴う第二次世界大戦下のアジアとヨーロッパの占領地における「グレーゾーン」に関する実証研究を実施するが、本研究メンバーの各テーマは以下の通りである。中国史研究者の側から上海のメディアから「グレーゾーン」を分析する。・日中戦争前後を跨いだ中国人対日協力者の身の処し方を検討する。・中国文学研究の立場から占領地の中国人文学者の立場に迫る。・図像研究から中国占領地社会を研究する。西洋史研究者の側では、戦後ドイツ史の観点から独とプリーモ・レーヴィの関係ならびにカポー（収容所で官吏として対ナチ協力したユダヤ人）のイメージの変遷を探求する。イタリアファシズムと教会との関係から「グレーゾーン」問題について歴史的に考察する。独占領下リトアニア臨時政府の対ナチ関係を実証的に分析する。枢軸国占領下「クロアチア独立国」におけるユダヤ人政策を研究する。

### 4. 研究成果

本研究の代表、研究分担者の個別研究成果を以下の通りである。

高綱博文「戦後上海〈グレーゾーン〉 - 上海最後の日本語新聞『改造日報』をめぐる」(『研究紀要』34号、日本大学通信教育部、2021年、67-88頁)

高綱博文「背山事件」(『史叢』104号、日本大学史学会、3-14頁)

高綱博文「戦後上海における内山完造」(『研究紀要』35号、日本大学通信教育部、2022年、27-46頁)

高綱博文(発表)「『改造日報』とその時代」(シンポジウム「戦後上海における対日情報戦のグレーゾーン」日本上海史研究会・アジア アフリカ文化財団主催、2022年11月26日)

関智英「華北青年党と日本 日中戦争時期の対日協力」(『現代中国研究』48号、2022年、26-45頁)

門間卓也「戦争・教育・ツーリズム ユーゴスラヴィア紛争の記憶と犠牲」(『史潮』第91号、2022年)

山口早苗『日本占領期上海文学とメディア 「対日協力者」の文化活動』(東京大学出版会、2023年、全238頁)

なお、本研究の成果は、2021年7月17日に開催したグレーゾーン研究会主催ワークショップ「戦時期『グレーゾーン』を架橋する 東アジア・欧州の占領地からの視点」と論文集である高綱博文・門間卓也・関智英編『グレーゾーンと帝国 歴史修正主義を乗り越える生の営み』(勉誠出版、2023年、全518頁)に集大成された。

前者のワークショップは、2020年度に開催予定であったところ、コロナ禍の影響を受けて延期した上で開催方法を検討した結果、Zoomのミーティング機能を使ったオンライン・ワークショップとして実施された。想定と異なる形ではあったが、コメンテーター(中田潤茨木大学教授、剣持久木静岡県立大学教授)および参加者の方々からも貴重なご意見とご質問を数多く頂くことが出来た。

本研究会には西洋史や東洋史といった学術的枠組みの下で研鑽を積んできた研究者が集まっているが、その共同作業を通じてよりグローバルな観点から「グレーゾーン」を巡る諸課題に接近するよう努めている。ただしその過程で困難に直面することも多い。一つに、研究に用い

る言語や対象地域の差異を背景としながら、既存の研究枠組みで使用されてきた歴史的概念の再考が求められることが挙げられる。本ワークショップでも「抵抗」や「協力」といった概念が議論の俎上に載せられた。その内容は以下の通りである。

開催趣旨説明（高綱博文）

報告

プリーモ・レーヴィの「グレーゾーン」概念とその射程（猪狩弘美）

リトアニアにおける対ナチ協力の階層性（重松尚）

中国青年党の対日協力 日中戦争下の「グレーゾーン」（関智英）

日中友好の「グレーゾーン」 戦時下の内山完造（高綱博文）

上海文壇から見る「グレーゾーン」山口早苗

「クロアチア独立国」における知識人とプロパガンダ（門間卓也）

イタリアの歴史研究における「グレーゾーン」概念（新谷崇）

コメント及び全体討論

このワークショップを通じて今後「グレーゾーン」研究を更新する上での課題を確認すると共に、様々な知見と刺激を得ることが出来た。今回の報告内容に更なる検討を重ねた上で、研究会メンバーを執筆陣の中心として上記の論文集『グレーゾーンと帝国 歴史修正主義を乗り越える生の営み』を刊行した。

本論文集は戦後75年以上を経ても、第二次大戦期の被害を受けた側ではその歴史的救済を求める声が途絶えることはない。実のところ、国家間の調停が繰り返される陰で、ナショナル・ヒストリーから「逸脱」した人々の歴史に光を当てるものである。近年台頭する歴史修正主義の論者は、「グレーゾーン」を恣意的に解釈しながら、現地住民と体制側の「癒着」をあたかも両者の同意に基づく現象と見做している。本書はこうした非学術的姿勢を強く批判するものだが、そのためにも支配者側の思惑に従って構築された現地社会の統治体制を読み解きながら、研究者を含めた一般の読者にも開かれた形で「グレーゾーン」の実態を詳らかにすることを意図している。その狙いから本書は「グレーゾーン」概念について西洋史・東洋史の立場から検討した上で、被占領地の統治体制や「コラボ」の役割を巡る個別論文に加えて、より広い地域を視野に入れたコラムの三段構えで構成した。以下のような内容構成である。

はじめに（编者一同）

第一部「グレーゾーン」のパラダイム

第一章 「グレーゾーン」概念の諸系譜（高綱博文）

第二章 プリーモ・レーヴィの「グレーゾーン」について（新谷崇）

第三章 ナチ体制下でのユダヤ人協力者をめぐって（猪狩弘美）

第四章 日本占領下上海文化の「グレーゾーン」をどう考えるか（鈴木将久）

第二部 大戦期欧州における対独協力とグレーゾーンの諸相

第五章 ナチ占領下フランスのグレーゾーン（渡辺和也）

コラム コラボラシオンの中のグレーゾーン（南祐三）

第六章 第二次世界大戦期におけるリトアニア人行動主義戦線（LAF）の対独協力

第七章 「クロアチア独立国」に囚われたウスタシャの知識人（門間卓也）

コラム 無 関係の領域としてのグレーゾーン（宮崎悠）

第三部 帝国日本と中国・東南アジアのグレーゾーン

第8章 日中友好の「グレーゾーン」（高綱博文）

第9章 上海文壇から見る「グレーゾーン」（山口早苗）

コラム 「和平建国」のあとさき（堀井弘一郎）

第十章 中国青年党の対日協力（関智英）

コラム パモオ小伝（武島良成）

コラム 日本占領下フィリピン社会の忘れられた「未完の革命」運動（荒哲）

おわりに（門間卓也）

年表

以上。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 関智英	4. 巻 48
2. 論文標題 華北青年党と日本：日中戦争時期の対日協力	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代中国研究	6. 最初と最後の頁 26 - 45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門間卓也	4. 巻 91
2. 論文標題 戦争・教育・ツーリズム：ユーゴスラヴィア紛争の記憶と犠牲	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 史潮	6. 最初と最後の頁 80 - 92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高綱博文	4. 巻 104号
2. 論文標題 「背山事件」の記憶	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『史叢』	6. 最初と最後の頁 3 - 14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高綱博文	4. 巻 35号
2. 論文標題 戦後上海における内山完造	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『研究紀要』（日本大学通信教育部）	6. 最初と最後の頁 27 - 46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高網博文	4. 巻 34号
2. 論文標題 戦後上海<グレーゾーン> - 上海最後の日本語新聞『改造日報』をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『研究紀要』（日本大学通信教育部）	6. 最初と最後の頁 67-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高網博文
2. 発表標題 『改造日報』とその時代
3. 学会等名 シンポジウム「戦後上海における対日情報戦のグレーゾーン」
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 高網博文・門間卓也・関智英・山口早苗・新谷崇・猪狩弘美他	4. 発行年 2023年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 518
3. 書名 グレーゾーンと帝国：歴史修正主義を乗り越える生の営み	

1. 著者名 山口早苗	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 238
3. 書名 日本占領期上海の文学とメディア：「対日協力者」の文化活動	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	関 智英  (SEKI Tomoide)  (30771836)	津田塾大学・学芸学部・准教授    (32642)	
研究分担者	新谷 崇  (ARAYA Takashi)  (30755517)	茨城大学・教育学部・助教    (12101)	
研究分担者	猪狩 弘美  (IKARI Hiromi)  (30732606)	桐朋学園大学・音楽学部・非常勤講師    (32662)	
研究分担者	山口 早苗  (YAMAGUCHI Sanae)  (30913066)	慶應義塾大学・理工学部(日吉)・講師    (12601)	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関